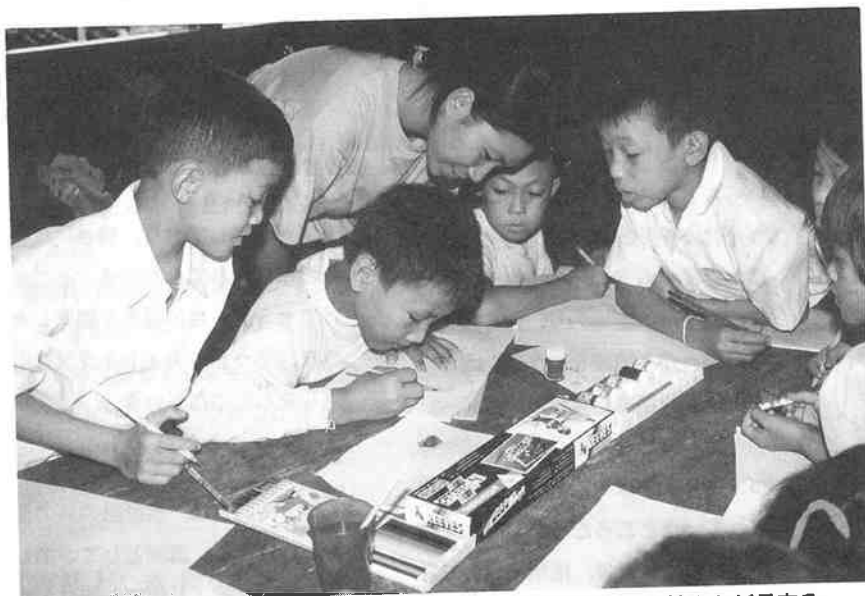


発行:ラオスの子供に絵本を送る会 〒143東京都大田区南馬込6-29-12 ☎03(3755)1603 TEL/FAX03(3755)1603

# ラオスの子供に絵本を送る会通信

第4号(1994年9月発行)



絵の具を使って絵を描くのは初めて。ボランティアの高校生のお姉さんが見守る。  
ヴォリカムサイ子ども文化センターで。



## 子ども文化センターが好調にスタート

【セミナー同行記】

### ■ヴィエンチャンの子ども文化センター、オープン式典が行われる

現地情報文化省が運営し、ラオスの子どもに絵本を送る会などが支援している「子ども文化センター」が、ヴィエンチャン市内で活動を開始。6月18日、同省副大臣、日本大使、オーストラリア大使館書記官、当会などが参加してオープン式典が行わ

れた。会では現地駐在員とともに東京事務所からもチャントソンら計3名が参加した。

ここは、図書室が設けられているほか、現在ラオスの小学校では行われていない絵画、工作、音楽などのプログラムを進めていくことになっている。すでに実質的に活動は開始されていて、この日も職員や子どもによる絵本の読み聞かせや、お芝居、

絵画教室が行われた。

お芝居は3～5年生が上演。演目はラオス版桃太郎。なぜ日本のものを？と思う向きもあろうが、会のメンバーが自分の知っている話ということで思いついたのがこれだったということ。みんな大いにノッてきて、鬼と戦う場面のためにさっそく刀をつくったところ、職員に「危ないからダメ」とたしなめられてボツ

編集部

になったとか。演出も自分たちでアレンジしている。人前でやるのはこれで2度目だそうだが、まるでものおじしない。セリフはアドリブがばんばん出てくる。実に楽しんでいるという様子。子どもたちはラオス版桃太郎をいたく気に入ってしまった様子で、教えた当人も驚いている。次回作品はラオスの昔話を、という大人の思惑はあるのだが....。

### ■会の支援活動の柱として

会では、子ども文化センターへの支援を活動の大きな柱として、図書館の書籍の購入、書籍の翻訳費用、職員の人件費、絵画・工作教室などの教材費用、備品の設置費用、指導の専門家の派遣などを援助していく方針を立てている。

書籍の翻訳とは、そもそもラオスには出版物が少なく、会でも現地出版活動を進めているが、今すぐ読む本を確保するため、タイ、日本など外国の本を揃え、それにラオス語の訳を貼り付けるという作業のこと。指導の専門家の派遣とは、紙芝居や工作の指導員の育成を目的に、日本などから専門家を派遣することをいう。そこで会では、日本で子どもの文化に関わる人々とのネットワークを強化して、協力を仰ぎたいと考え

ている。

### ■ラオスにとって初の試み

子ども文化センターはラオスにとってまったく新しい取り組みで、手さぐりをしながら進められているといったところだ。

ヴィエンチャンばかりでなく、その隣のヴォリカムサイ県でも子ども文化センターは動いおり、むしろこちらのほうが、地域を巻き込んだドラマチックな展開を見せている。

一見、体育館のようなその建物は、つい先日まではナイトクラブが営業されていたところだった。それを情報文化省、教育省、地域の親の三者が一体となって(これは初めて試み)、ジワジワと運動を進め、子どものための施設にしてしまったという。

私たちがここを訪れたのは、6月18日、「ヴォリカムサイ県 子どものための読み書き推進セミナー」の初日だった。この催しは、子どもたちと小学校の先生を集め、2泊3日で読み聞かせ、お絵描き、作文、民族舞踊、ゲームなどを行うもので、60人の募集に対してその3倍近い応募があったという。

ヴォリカムサイ県では3月から子ども文化センターの運営に取りかかり、正月(4月)にオープンした。

セミナー自体は2月にも1度行われている。そのときはまだナイトク



順番で泥棒、警官、被害者、目撃者になる。これぞロール・プレイング・ゲーム。

ラブが営業しており、舞台には楽器などが置かれていたため、そこを避けてセミナー用の場所を確保したそう。そうしてナイトクラブは引っ越しをしたのだという。

### ■盛り沢山のプログラムのセミナー

絵の時間では、水彩絵の具の使い方から教える。講師として参加している作家ウティン氏のお嬢さんなど高校生のボランティア2人も手伝って、「赤と青を混ぜると、ほら緑になるでしょ」と、絵の具の混ぜ方をやって見せる。子どもたちは興味津々、すかさず自分でもやってみる。

作文の時間の子どもの表情は真剣そのもの。脳細胞をフルに使っているという様子で、美しい光景だなどと思う。人間というのは知性の生きものなのだと改めて気づかされる。

ゲームの時間。おもしろいゲームがあったので紹介したい。床に四角形になるように線を描き、それぞれの角に一人ずつ立ち、泥棒、被害者、目撃者、警察官となる。それぞれが自分の言い分を言い合う。そして交代の合図とともにひとつずつずれる。立場が変わり、さっきまでの警官役が今度は泥棒役となり、追及する立場から無実を主張する立場になる。残念ながら何を言い合っているのか



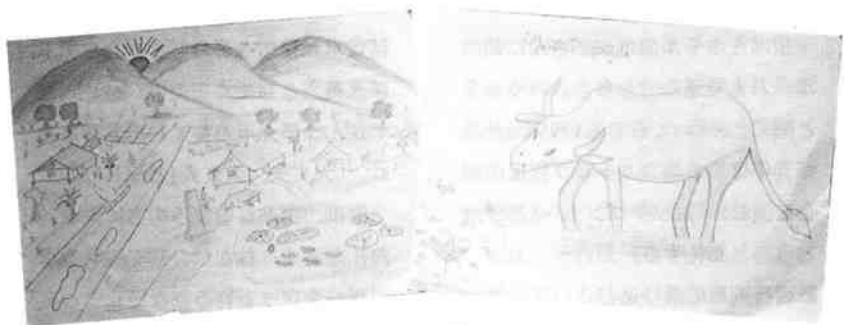
小学生のお芝居。ヴィエンチャン子ども文化センターで。

はわからないが、スピーディに展開されてスリリングなおもしろさは伝わってくる。

民族舞踊の時間。子どもたちはお化粧をし、民族衣装を身にまட்டுて登場。職員の話によれば、ちゃんと踊りの先生にならっていないので正しい踊りになっていないそう。200ドルあればきちんと教えられるのだけれどと言われ、何とかしましょうと答える。

参加していた先生(36歳)にインタビューした。

「とても興奮しています。子どもたちとこんなにいろいろなことができるということが、よくわかりました。学校では、図画は教える先生も教材



ラオスの子どもたちから、会へ絵の贈り物。

もありません。校舎の改修を行っているのですが、資金不足で2年たっても遅々として進まない状態です。教員も給料だけではとても生活できないので、農業との兼業で、忙しいですね」

子ども文化センターはスタートし

たばかり。担当の職員もはりきっており、地域の親たちやセミナーに参加する先生たちの期待も大きい。私たちの会としても、資金面、技術面でできるかぎりの支援をしていきたいと考えている。

## 【実録！ 絵本の旅】

# 西馬込からヴィエンチャンへ

森 透

現地視察の旅はまた、物資輸送の旅でもあります。その道中やいかに。

### ■東京事務所(西馬込)で梱包

購入した本、寄贈された本や鉛筆などを梱包する。今回の出張の人数は3人。飛行機に積み込めるのは1人につき20kgまでで、それを超えたとお金をとられる。しかもそれがばかにならない金額なのだ。だから計60kgを目安に箱に詰める。「目安」としたのは成田ならば多少オーバーしていてもたいていは目をつぶってくれるからだ。バンコクだとしっかり請求される。

詰めた箱をどっこいしょと持ってヘルスメーターに乗って計量する。結局合計100kgになってしまった。ま、なんとかなるさ、目安も何のその、で作業終了。

### ■成田空港でチェックイン

事務所から成田までどう運ぶかで議論。A案は宅配便を使う、B案は電車で積み込んで自分たちで運ぶ。節約してB案に決定するが、どたんばでA案に。理由は重くて無理ということが判明したため。今回の出張は女2名、男1名で、うち女1名は腕の故障で重いものが持てず、男1名は座骨神経痛で頼りにならずといった塩梅。どうなることやら。

空港カウンターのタイ航空のお姉さんは100kgの荷物をすんなり通してくれた。感謝。午前11時、離陸。

### ■バンコク、ドンムアン空港へ到着

現地時間午後3時、バンコク、ドンムアン空港到着。ヴィエンチャンへ行くには、飛行機を使う方法と、夜行列車で国境の町まで行ってメコ

ン河を渡る方法がある。今回は後者。安いし電車の旅もオツなもの、それに開通したばかりのメコン河をまたぐ＜友好橋＞を渡ってラオスに入国してみようという思いがあった。とはいえ荷物を運ぶという点からは、とんでもない選択。

ドンムアン空港から鉄道の駅までは、歩道橋で道路をまたいですぐ。しかし列車に乗るのは午後7時42分なので、まだ4時間以上ある。駅のそばの空港ホテルにしばらくの間、荷物を預かってもらう。ホテルまでは空港のカートを使うことができた。よかった。しかし預かり料はいくらかかるのか、チラッと心配になるが、ま、たいしたことないだろうと勝手に決めて、近くの食堂へ。ごはんを

食べて夕方を待つ。

預けたホテルのボーイさんに駅のホームまで運んでもらう。いくら？と聞くと、「いくらでもいいよ」と、好青年はニコニコ。チップ程度のお金を渡し、「コックプンカー（ありがとう）」とお礼する。

#### ■夜行列車に乗り込む

駅のホームに荷物を置いてホッとする間もなく、さて困った。国境の町ノンカイ行きの列車は19両のなが〜い編成。今、荷物を置いてもらったのは2両目あたり。我々の指定車両は15両目。はるか後ろに止まるのだ。何個もある重い段ボール箱をどうやって運ぼう。

根性しかない。ホームの上をズルズル引きずる。向こうから「腰に悪いからやめて」と心配して声がかかる。と、スーツと線路の上を、四角い板に乗ったおじさんが動いていく。板に滑車を付けて、筏のように竹の竿を使って勢いをつけている。「これだ！」。すかさずチャンタソンに「あのおじさんを止めて！」と叫ぶ。

おじさんにわけを話し、段ボール箱を積んでもらって線路の上を移動、

ホームのはじの方に運ぶ。と、今度は電車が警笛を鳴らしながらホームに入ろうとしてくる。「危ない！ おじさん、早く下ろして！」。おじさんは、「大丈夫、大丈夫」と涼しい顔。

無事、ホームの後ろの方に乗せ、お礼を渡す。しかし、我々の乗る車両が、今立っているここに止まってくれるかどうかはわからない。ホームには何も表示がないからだ。案の定、5両分ずれていた。乗ってから、また車内の移動となった。

#### ■メコン河を渡ってラオスへ

朝、ノンカイへ着くと、待ちかまえていたトクトク（オート三輪のタクシー）の運ちゃんたちが、列車の降り口にワッと寄ってきて荷物をつかむ。オレのトクトクに乗れということなのだ。2台のトクトクに乘せる。さて、運賃の料金交渉の開始。チャンタソンがペラペラとタイ語で値切るが、運ちゃんは、話にならんとはいたげに声を荒立て、荷物をドンと叩く。ほぼ言い値でOKすると、コロツとニコニコする。まったく現金なものだ。あきれてしまうよ。

メコン河からはシャトルバスに乗

り換え、友好橋を渡り、ヴィエンチャンへ。道路はタイの右側通行からラオスの左側通行に変わる。入国の手続きで、段ボールを開けられ、本のチェックを受ける。「援助の絵本だから問題ありませんよ」と説明する。ようやくヴィエンチャンへ。現地事務所のメンバーに出迎えられる。荷物はいったん会の事務所へ置かれ、それから子ども文化センターへ運ばれる。絵本の長い旅は終わった。

\*            \*

と、まあ、こんな具合で、ドタバタとやっていますが、現在、会では物資を日本から送る援助を見直しています。ラオス国内、あるいはタイで調達できるものがほとんどで、そのほうが安いからです。東京事務所が、慢性的な人手不足で、梱包、発送作業も遅れがちになってしまっていることも、もうひとつの理由です。

そこで現在、会では、絵本は会で選んだ作品のみに限って送り、それ以外のものはお金で送ることになっています。どうぞみなさん、この趣旨をご理解のうえ、ご協力ください。

## ラオス語のすすめ

### 森 千也（元事務局長・バンコク在住）

「ラオスはタイの属国になった方が幸せなのではないか」

「もともと親戚同士のようなものだから、この際、一つの国になった方がよい」

もしもこんな話が勧告と日本を引合いになされようものなら、誰もが「とんでもない」と異論をはさむに

違いない。しかし、話がラオスとタイの関係になると、なぜか真面目にこんなことを口にする人が出てくる。しかも、ラオスの現状をよく知っている人ほど、こうした考え方に思わず相槌を打ってしまいがちだ。ラオスを短期間訪れる人は概して「ラオスはよい国だ」と言う。その理由は、

要するにラオスが経済発展に乗り遅れているために、のどかでのんびりした人間の生活リズムが今でも忘れられていないといったところにあるのだろう。しかし、個人的な感情を別にすれば、ラオスの所謂「遅れ」は今後のラオスそのものの存亡に関わる重大時といっても過言ではない。

今年4月8日に完成した「タイ・ラオス友好橋」の開通に前後して、当地タイでも様々にラオスの現状が紹介された。そうした一連の報道の中で、いちばん私の印象に残っているのは、タイのマスコミにインタビューされたときのラオスの首相のことばである。友好橋の完成に伴い、今後ラオスがどのように発展していくと思うかという質問に対する首相の答えは、タイの経済発展に追従せざるを得ないという点はある程度認めたうえで、しかし、ラオス固有の文化だけは堅持し続けることを特に強調していた。首相が強調した固有の文化とは、すなわち「ラオス語」である。

タイ語はタイ全国どこに行ってもまず不自由なく通じる。これは、戦後の国民統合政策の一環として小学校4年間を義務教育化し、標準タイ語の教育を全学童に徹底した成果であり、これによってタイの文盲率は急激に低下したと同時に、「国民・宗教・国王」を国体原理とするタイ国家のアイデンティティが確立された。タイにも古くから多くの移民が流入してきたが、少なくとも彼らがタイ語に不自由しない限りはタイ国民として広く受け入れられている。タイの寛容な国民性といった抽象的な表現もできるかもしれないが、要はタイ国民としてのアイデンティティとしてよって立つものが「タイ語」に集約されているのだと、私は思う。実際、タイには日本の国語審議会のような諮問機関があり、国語審議会以上に厳しくタイ語を監視している。ここの認可によって公式な辞書に登録されない限り、どんな新語もタイ語としては認知されない。母国語に

無頓着な日本人には窮屈な制度のように思われるかもしれないが、言葉というものは民族や国家を代表できる最も基底の「文化」なのだ。

\* \* \*

ラオスとタイは同じ系統の語族として言語的に分類される。実際、お互いの言葉で話し合ってもたいがいのことは意味が通じるという。しかし、この便利さがかえってラオスにとっては問題となる。タイの情報がテレビの電波によって絶え間なくラオスに降り注ぎ、ラオスの人たちはタイの「文化」にどっぷりと浸ってしまっているからだ。その一方で、ラオス政府は主に財政的理由から国民に対する義務を必ずしも果たし切れていない。学校教育がその顕著な例で、国民意識を育むべき初等教育も地域住民の手で学校を建て、自ら基盤整備しなければ実施されない。また、たとえ開始されたとしても、教職員の給与を生徒の親が補填しなければ学校運営もままならない。要するに国自体が貧しいのだ。だからこそ、国民一丸となって国の発展のために努力しようという機運を政府が盛り上げいかなければならないのだが、何の恩恵も与えてくれない政府を、そして国を、一体国民が積極的に支持していくだろうか。「いっそのこと、タイの属国になった方が自分の生活は良くなるのではないか」と考えるラオス人がいたとしても、はたしてそれを全面的に否定できるものだろうか。

ラオスのような経済状況の国は世界にまだまだたくさん存在する。にもかかわらず、ラオスだけが国の存亡そのものまでも疑問視されてしまうのは、やはり隣国タイの強大な

存在のためである。ラオスにもこれに負けない確固としたアイデンティティがあれば良いわけだが、社会主義が実質的に形骸化した今、民族・国家としてタイと一線を画することが出来るものは一体何なのか。

私は、それは「ラオス語」なのだと考えている。私は専門家でも何でもないで、ラオス語の言語学的な特徴を長々と述べるなどできないが、タイ語・ラオス語・カンボジア語とつまみ食いしてきた経験から他の2つの言葉と比較すると、ラオス語は言文一致を意識した非常に合理的な言葉だと思う。その意味で、日本人がこれらの言葉を習うとするとラオス語が最も理解しやすいのではないだろうか。この点はタイ語と明確に違い、実際、同じような合理化をかつてタイでも行おうとしたことがあるのだが、言葉に対する保守性がかえってそれを受け付けず、結局実験的に導入された改革は2年足らずで挫折した歴史がある。ラオスの人たちは、もっともっとラオス語に誇りに思っていよと思う。先のラオス首相の言葉は、私のそんな思いをラオス人の立場から裏付けてくれたように感じたのだった。

「ラオスの子供に絵本を送る会」は、ラオスの子どもたちにもっともっと文字に接する機会を与えてあげたいという気持ちから始まった。今、タイに居ながらラオスを見ている私は、ラオスの子どもたちにもっともっとラオス語のすばらしさを教えてあげるといふ、新たな使命をもこの会に期待している。ラオスがタイに飲み込まれてしまわないようにと願いながら。

## ◆ 駐 在 員 日 記 ◆

木口 由香

### 【ある週末① “我が家” にて】

同居人たちは皆、起きている音がする。一人いつまでもベッドにしがみついている訳にはいかない……、と思いつつ、次に気がついて時計を見ると、さっきより針が1時間は進んでいる。いい加減起きなくては。

こちらの習慣に従い、顔を洗うだけでなく水を浴びてしまう。これですと目がさめる(ラオス、タイでは、お湯を浴びない。代わりに頻繁に水を浴びる)。居間に出ると、テーブルの上にはラオス製コーヒーとフランスパン。「寝坊しちゃった」と、何だか毎週口にしている照れ隠しとともに席につく。

“我が家”には3人の同居人がいる。皆、ラオスで援助関係の仕事についているタイ人の女性たちだ。共通する話題も多く、ひとしきり仕事の話、先週のおかしな出来事を話して、朝食を終わる。それぞれ部屋の掃除や仕事、読書などにとりかかる。「私は今日、何をしなくちゃいけないんだっけ？」東京の事務所に提出する報告書の作業の続きか、移動図書箱の配布などの写真の整理か、はたまた絵本の翻訳か……。翻訳というのは、今年オープンした「子ども文化センター」の図書室に入れるための日本の絵本に、ラオス語の訳文を貼り付けるためのものだ。ラオスでは、出版物が極端に少ない。そこ

で図書室には、日本の絵本で日本の子どもたちにも人気が高く、良質と思われるものを選んでそろえることにしているのだ。

そうこうしているうちに、もうお昼。近所の市場に走って、タム・マクフン(パパイアの辛いサラダ)を買ってきて軽い食事をする。

草だらけの庭の隅に、日本から送ってもらった花の種をまいた。この間植えた鳳仙花は、あっという間に育って、あっという間に枯れてしまった。庭でしばらくぼんやりしていると、隣の敷地から「ザッパーン、ザッパーン」と水の音。塀の穴からのぞくと、水牛が水浴び中。巨大な水たまり(いつも水があるわけではないので、池とは言い難い)から、頭だけ出している。隣も大家さんの敷地。この水牛が大家さんのものかどうかは知らない。大家さんは、以前、庭でうさぎを沢山飼っていたそう。食用にするのである。“我が家”でも何か飼おうかと相談する、庭も雑草だらけだし。

「山羊は？」「だめ、洗濯ものまで食べちゃう」「鶏なら？」「夜中の3時に鳴くよ」「牛は？」「……」山羊を動物園でしか見たことのないような東京育ちの日本人の意見は、実生活には適応できないものらしい。

夕食。市場で買った野菜で、野菜炒めとスープと……。洋風、日本風、

タイ風あり。みんなで食卓を囲む。

「あっ、書類つくるの忘れてた！」結局、夜中までワープロに向かう。学校に通っていたころ、日曜の夜になると宿題を思い出したりするような癖は一生直らないのかも知れない。

### 【ある週末② 郊外へ】

朝からはりきって出かける。郊外の村で、昔話を聞かせてもらうのだ。日本の援助でできた国営バスに乗って、ヴィエンチャン特別市のポーンサイ村へ向かう。ここは、戦災を避けて十数年前にシェンクワンから移住してきた人たちの村。きっと、まだ物語とかが語られているに違いないとの期待があったのだ。ヴィエンチャンの朝市の前から出るバスに乗ること2時間弱。途中で舗装道路は終わり、埃まみれなところに到着。

今晚お世話になる家に落ちつくと、早速、近所の人が偵察に来る。隣の家のおばあちゃん、子どもたちが入れ替わり立ち代わり、ひとしきり。男の子がお話をするおじさんを呼びに走ってくれた。しばらくして戻ってきて「水浴びしてから来るって」。

しかし、待っても待っても来ない。案内してくれた学校の先生が、隣の村まで行ってみようというので、一回りして戻ってきてはまだ来ない。「きっと暗くなってから来るよ」と先生。井戸で水浴びをさせてもら

ったりしているうちに暗くなった。  
果たしておじさん2人が登場。

こういう場合、まずは酒。ラオスのお酒は米焼酎の地酒。40～50度はあろうかというものを、お猪口くらいのコップで、一気にあおる。ひとりが杯をとって音頭をとる。まずは自分で飲み、その後その人が順番に一座の人について回る。もし酒好きがいると悲惨である。その人が何度も杯をあげることになり、まわりも付き合わされる(どことなく日本の風習に似ているような)。ふつう女性は飲まなくてもとがめられないが、私も嫌いな方ではないので、「うー、胃に穴があく」と思いながらも、最初の2、3回は参加してしまう。

さて、ガソリンが入ったところで、お話の始まり。「犬が家の番をして、猫は人間と一緒に、食事ができるのは何故か」とか「ラオス版母をたずねて」「シェンクワンの歴史」など。話の合間に、日本のことをいろいろ聞かれる。個人的なこといろいろ。まず最初の質問は、「結婚しているか？」である。していないと言うと、「ラオス人と結婚しなさい」。この日は、この家の青年(まだ20歳になっていなかった)はどうかと勧められる。私の方が10歳近く年上だと言うと、一同「えーっ!」。すみません、童顔で。

そんなこんなでお開きになって、早々と蚊帳に入る。明日は5時起き。朝一番のバスに乗って、ヴィエンチャンに帰る。ときどき聞こえる「カラン、カラン」というカウベルのほかには音のない静かな村の夜。やがて、3時には鶏が鳴き、犬が吠え、5時には否応なく目が覚める。今日は月曜日。

## 《ラオスの昔話》

### ◆ラオ族の昔話から

#### 「シェンミヤンの薬」

王様は毎日ご馳走ばかり。でも、一日中座って仕事をしているので、お腹も空きません。ある日、王様はため息をつきました。

「おいしい料理が食べたいのう」

そこで、王様は知恵者のシェンミヤンを呼びにやりました。

「シェンミヤン、わしは何を食べてもおいしくない。何かよい薬はないか？」

「ありますとも、王様。明日にでもさっそくお持ちしましょう。明日の昼は何も食べずに、私が来るのを待っていて下さいよ」

王様は、喜んでシェンミヤンを帰しました。

さて翌日。王様が待てども暮らせどシェンミヤンはやってきません。王様のお腹はグルグル鳴っていました。昼の時間はとうに過ぎています。

「シェンミヤンはまだか！」

王様はしびれを切らし、お付きの者に呼びに行かせようとする、ひょっこりシェンミヤンが現れました。

「王様、さあ食事をどうぞ」

「薬はどこじゃ、シェンミヤン！」

「まあまあ、食事をしてみて下さい」

王様は怒っていましたが、お腹がペコペコで、すぐに食べ始めました。

「ん、うまい！」

王様は久しぶりにおいしく食事をしました。王様は空腹なることがないので、何を食べてもおいしくなっただけなんですよね。でも、それ以来、ラオスの人は、食事時間が遅れると、必ず、「シェンミヤンの食事」と言い合うのです。

### ◆モン族の昔話から

#### 「なぜ女性は髪を伸ばさなければならないか」

昔あるところに、少年と少女がいました。二人は一緒に勉強していて、天の神様のところに住んできました。そのころは、人が勉強するときは、天の神様から教えを受けたものだったのです。少年と少女は一緒に寝起きをしていましたが、同じ姿をしていたので、少年は少女が女だということに気がつきませんでした。二人はとても仲が良く、友達として愛しあっていました。さて、神様から教えを授かり、二人は無事に地上に帰ってきました。そこで少女の父は娘を嫁に出すことにしました。相手は一緒に学んだ少年ではなく、別の王族の息子でした。

少年はその話を知り、びっくりしました。少女をととても愛していましたので、彼女が他の人と一緒になると聞いて絶望してしまい、少女の婚礼の前に自殺してしまいました。

婚礼の日、その行列は森の前を通りました。そこには少年が葬られていたのです。少女はその前を通るとき、花婿にちょっと用を足してくるといって森に入りました。少年と少女の心はしっかり結びついており、少女も少年を愛していました。彼女は少年が死んでしまったことを悟り、葬られているその場所で死んでしまいました。その後、少年の霊が人々を訪れて、「これからは女性は女性とはっきりわかるように、髪を伸ばすことにして下さい。二度とこのようなことがないように」と告げました。それからモン族の女性たちは髪を伸ばすようになったとのこと。

## お知らせ

### ■ヴィエンチャン駐在員の帰国報告会を行います。

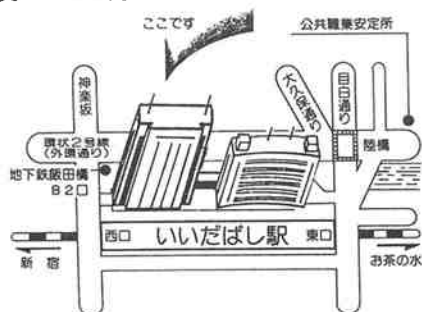
昨年夏よりヴィエンチャン事務所に駐在していました木口由香が、1年間の任期を終了します。そこで帰国報告会を開催します。どうぞ、ご参加ください。

日 時：9月27日(火曜日) 18:45~20:30

場 所：飯田橋・セントラルプラザ 11F

「中央労政会館」第1会議室B

参加費：500円



### ■「'94国際協力フェスティバル」に参加します。

NGOや国連、海外青年協力隊など、国際協力を行っているさまざまな団体が参加して開催される「国際協力フェスティバル」に私たちも参加します。今年のテーマは「地球家族の一員として」です。

会では、ラオスで制作した本など活動紹介の展示のほか、ラオス語 モン語(ラオスの少数民族モン族のことば)、日本語による絵本の読み聞かせの実演や「子どもの文化から見た“豊かさって何?”」というテーマで、来日中のラオス人作家のドゥアン・ドゥアンさんを迎えてのトーク・セッションなどを計画中です。どうぞおこしください。

日 時：10月1日(土曜日) 10:00~17:00(出展時間)

10月2日(日曜日) 10:00~16:00(〃)

場 所：日比谷公園

### ■定例のミーティングの開催日が変更になりました。

9月より、毎月、第1日曜日となります。

時間は、これまで通り、午後1時からです。

活動に参加してみたい、一度のぞいてみたいという方、お気軽にどうぞ。

参加ご希望の方は、お電話をください。

場所：会事務所(都営地下鉄浅草線・西馬込駅下車 徒歩

5分) ☎03(3755)1603

### ◆寄付金の領収書発行について◆

これまで、お寄せいただいた寄付金には、領収書を送りしてきましたが、今後、9月以降にいただいた分からは次のようにさせていただきます。

- ・領収書は、ご希望の方のみの発行とする。
  - ・そのほかの方については、『通信』の寄付者名簿欄への氏名掲載で領収書の代わりとする。
  - ・匿名をご希望の方は、ご寄付くださる時点で、その旨お知らせください。
  - ・この方式は、次号の『通信』第5号からとする。
- 以上、ご了承ください。

### 「これならできる」「たまにならできる」

という方、お手伝いください。

会では、慢性的な人手不足に陥っています。会の運営に参加していただける方、事務作業のお手伝いをしていただける方を求めています。

例えば、次のような作業があります。

- ☆『通信』など郵便物の発送作業
- ☆イベントでの民芸品などの販売
- ☆名簿づくり(パソコンに入力する)
- ☆会計の事務(帳簿を付ける、パソコンに入力する)
- ☆資料の整理
- ☆『通信』の編集
- ☆翻訳(英語、タイ語、ラオス語)

これならできる、たまにならできるという方、同封のはがきを送っていただくか、電話をください。パソコンなんてできないという方も、会のメンバーがお教えします。すぐできるようになりますからご安心を。もちろん、何でもできる、いつでもできるという方もお待ちしております。

## ご寄付をお待ちしています

私たちの活動を資金面から支えてくださる方は、郵便振替にて、下記までご送金ください。

【東京 0-125420 ラオスの子供に絵本を送る会】